

## 知的障害児教育における授業研究

- 養護学校高等部における「就労と職業センター」の授業実践の分析を通して -

大谷博俊

(和歌山大学教育学部附属養護学校)

### A Study of Teaching-Learning Process in Education for The Mentally Retarded

Hirotoishi OTANI

2003年9月30日受理

This article analyzed from the viewpoint of criticism of instruction upon vocational education and guidance for students with mental retardation.

The main results were as follows: (1) the vocational education and guidance was found to be appropriate. (2) it was necessary to compare teaching aim with student's learning activities, and to prevent their declining attention. (3) it was necessary to reconsider planning a team-teaching, and teacher's intention.

#### I 問題と目的

教育現場における重要な実践研究に授業研究がある。障害児教育分野において、研究者による授業研究が行われるようになったのは、比較的最近のことであるが(太田,1991)、その重要性は清水(1989)、太田(1991)や広瀬(1991)らの指摘するところでもある。

授業研究のねらいは、授業改善であり、よりよい授業を求めてのことである。授業の改善のための授業研究の方法として、太田(1992)の提唱する授業批評があり、それに基づく実証的な研究も行われてきている(太田,1993;1995b;大谷,2002)。

一方、障害者の地域生活における「職業自

立」が果たす重要性は、近年、社会に広く認識されつつあり、知的障害児教育においても進路指導に関する研究が活発に行われている(渡部,1997;松矢,1997;松為,1997;芻田・木村,1999;堀・松矢,2003)。渡部(1997)は、後期中等教育におけるこれまでの他律的・選別的なジョブマッチングによる就労第一主義、社会適応主義に偏りがちであった進路に関する教育を批判している。そして、彼は進路指導に導入されるようになっている職業選択を個人の成長・発達における継続的な過程として捉えるキャリア発達の概念に注目している。また、松為(1997)は、知的障害を持つ人のキャリア発達を阻害する諸要因の除去・軽減のために「社会的支え」が不可欠であると、

仕事の世界への参入の準備期には、本人の様々な特性を発達させて自立に向けた学習の支援が必要であることを指摘している。学習指導要領においても進路指導の充実とガイダンスの機能の充実が求められており(文部省,1999)、「自己の意思と責任で自己の進路を選択決定する能力や態度を育むこと」「適切な情報提供や案内・説明、活動体験などを学校の教育活動全体を通して行うこと」の重要性が指摘されている(文部省,2000)。

進路指導論の新しい流れとして提起されてきた進路学習は、これらに基づく学習支援であると考えてよいだろう。松矢(1997)は、進路を選択する障害者(生徒)の意思や主体性を尊重した支援の1つとして進路学習を位置づけ、進路指導における進路学習、現場実習と進路相談の関係構造を示している。このような指摘がなされる中、知的障害養護学校においても進路学習を独自の授業時間として設定し実施しようとする試みが認められるようになってきている。

しかし、これらの試みはまだ緒についたばかりであり、自己の理解の促進や主体的な選択決定のための適切な情報提供や案内・説明

を目的とするガイダンス活動をどのように授業として展開していくのかという授業計画・展開の検討、進路学習の理論化、その普及など今後の研究に待つべき点も多い(堀・松矢,2003)。進路学習は学校教育の中で行われる授業であり、その意味において授業としての質が問われることは言うまでもない。進路学習の理論化や普及など、そのあり方を考えるとき、進路に関するガイダンス活動を授業として捉え、授業の目標や教材、目標達成の手だてなどの適切さを検討し、その質を高めていくことは重要だと思われる。

そこで、本稿では、A養護学校(知的障害養護学校)において行われた地域障害者職業センターとの連携による進路学習を授業批評の分析の視点で捉え、授業の目標、教材や目標達成の手だての適切さについて考察したい。

## II 方法

### 1) 対象授業

本研究の対象とする授業は、A養護学校での2つの授業である。授業の概要をTable 1に示した。

Table 1 対象授業の概要

題材名・授業計画	「就労と職業センター」 全3時間 6月30日 3限目(第1時)、5・6限目(第2時)	
指導者・生徒の数など	(第1時)指導者は1名で行った。生徒は、指導目標、将来像や知的発達をもとにグループ化した高等部2年生の1つのグループ(Bグループ)。生徒数は5名である。	(第2時)指導者C(地域障害者職業センターのカウンセラー)と指導者D(教師)の2名で行った。生徒は、2年生Bグループの5名とBグループと同様にグループ化した1年生の生徒(Eグループ)5名の計10名である。
授業の概要	生徒はテレビ画面に映し出されるプレゼンテーションソフトで作成した教材を見ながら、就労を支援する地域障害者職業センターについて指導者の説明を受ける。その後、プレゼンテーションソフトで作成した教材を見ながら、生徒がよく利用する駅から地域障害者職業センターまでの略地図を作る。	生徒はBグループとEグループに分かれて席に座る。生徒はテレビ画面に映し出されるプレゼンテーションソフトで作成した教材やビデオ教材を見ながら、就労に向けた準備と地域障害者職業センターの職務内容について指導者Cの説明を受け、質問に答える。指導者Dは司会、進行及び指導者Cと生徒との調整を行う。

## 2) 手続き

太田 (1995a) による授業の分析のための手続きを参考に授業実施までの経過、実態把握、授業意図、授業目標、授業の様子を授業案及び授業のビデオ記録を用いて分析した。また、対象授業の第2時については、学習に対する生徒の批評(評価)も加え、分析した。対象授業の第2時に参加したEグループの生徒は、第1時の授業を受けていないので、授業の分析からは除外した。

学習に対する生徒の批評は、対象生徒が学習内容の理解と授業について評価した。学習活動の理解については、担任が「今日のセンターの先生の話聞いて分かったことに丸をつけてください。例を見てください、括弧の中に丸がついていますね、このように丸をつけてください。丸はいくつ付けてもいいです。でも、丸はたくさんつけなければならないことはありません。今日の話聞いて“分かった”と思うことだけに、丸をつけてください」という教示を行った。回答は、項目ごとに理解度(理解したと回答した人数/全人数×

100)を求めた。

授業については、担任が「問題を聞いて、一番当てはまるところに丸をつけるのです。問題(練習)を読みます。いいですか。“進路の授業は楽しい”どうですか。楽しいと思ったら「思う」に丸をつけましょう。少し楽しいと思ったら、「少し思う」に丸をつけましょう。楽しいか、楽しくないかよく分からないと思ったら「どちらともいえない」に丸をつけましょう。あまり楽しくないと思ったら「あまり思わない」に丸をつけましょう。楽しくないと思ったら「思わない」に丸をつけましょう。よく考えて、一番当てはまるところに丸をつけてください」という教示を行った。回答は5段階の評定である。

## Ⅲ 結果

2つの授業についての授業実施までの経過は、Table 2に示した。また、授業案から実態把握、授業意図、本時の目標、授業の様子をまとめてTable 3に、授業の展開はTable 4に示した。学習活動に対する生徒の批評はFig.1とTable 5に示した。

Table 2 授業実施までの経過

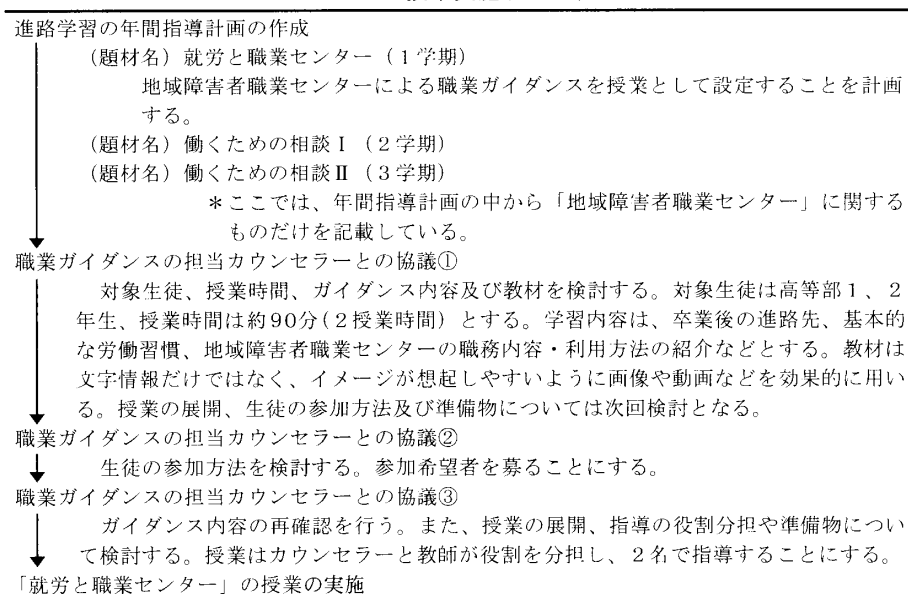


Table 3 授業案における実態把握、授業意図、本時の目標及び授業の様子

	第1時	第2時
実態把握	Bグループ5名。障害の程度は中度・軽度（療育手帳の判定による）の生徒が多い。生徒はグループで事業所での実習を3回（合計4週間）経験し、事前事後の指導も受けており、働くことに対する認識が育ってきているように思われる。卒業後の働く生活に関心があり、事業所での就労を意識している生徒もいる。	
授業意図	就労に向けた支援には、ハローワークや地域障害者職業センター（以下、センターとする）などとの連携が不可欠である。しかし、これらの支援機関を知っている在校生はほとんどいない。高等部在籍中にその存在を知らせ、その利用について学ぶことは極めて重要な学習課題であると考えられる。 生徒（卒業生）が就労のためのサービスを利用する場合、彼らの主体性が大切であり、まず、利用に対する抵抗感を低減する必要があると考える。本授業では、デジタル画像や動画を取り入れた教材を用い、彼らのよく利用する駅からセンターまでの略地図を作ることによって、センターが彼らの行動可能な範囲にあることを知り、身近に感じることができればと考えている。	センターは、A養護学校が設置されている地域（A市）で知的障害者の就労に深く関わっており、支援実績も豊富である。本授業では対象生徒が提供される実績に基づいた専門的な知見に触れることにより、就労に対する意識を向上させ、就労支援についての知識を習得できればと考えている。 一方、本人の主体性を尊重した就労支援の利用には、利用者の抵抗感の低減が必要である。抵抗感の低減のためには、センターの支援者について知ることが挙げられる。本授業では、職業センターのカウンセラーが指導者になっており、職業センターの既知度を高め、抵抗感を低減することが期待できよう。
指導目標	①職業センターの存在について知り、それがどこにあるのかを理解する。	①一般就労に向けた望ましい態度、マナーや習慣を身につける必要があることに気づく。 ②職業センターが行っている就労のための相談やサポートなどのサービスについて知る。
授業の様子	就労を支援する機関として、ハローワークを知っている生徒が1名いたが、センターについては全員知らなかった。センターまでの道程を示すと、目印になる駅、銀行やコンビニエンスストアなどの名前について、指導者の質問に積極的に答えていた。 動画で方向を示したときには、理解できない生徒が2名いた。動作で繰り返し確かめると理解できるようになっていった。ほとんどの生徒は、画像で示された駅からセンターまでの道順を覚えていて、目印になる画像を切り抜き、意欲的に略地図を作っていた。次時に予定している職業ガイダンスでのカウンセラーに対する質問は、なかなか思いつかないようであった。	卒業後の進路について指導者Cが個別に指名すると、仕事をしたいと答えていた。 ビデオ教材を見て3カ所のうち1カ所の就労場所が分かった生徒が1名いた。ビデオは集中して見ていた。基本的な労働習慣の優先順位は分からなかった。 基本的な労働習慣などの学習では、指名されると答えられない生徒が1名いたが、全員よく考えて答えようと努力していた。教材の画面はよく見ていて、話にも集中していた。 センターのサービスについての学習は、始めはパンフレットを見てしっかり聞けていたが、途中から注意が散漫になる生徒がいた。 企業が重視する事柄、家庭の支援やセンターの利用事例の学習では全く聞いていない生徒がいた。 指導者Dの働きかけに応じて、2名がカウンセラー（指導者C）に質問した。生徒には指導者CとDの二人で回答した。

#### IV 考察

知的障害養護学校高等部への入学者の増加や経済状況の悪化により、卒業時点での就職が困難な生徒が多くなってきており、中・長期的な就労に向けた支援を計画する必要が生じている。学校から職場への移行に向けた中・長期的な支援には、学校とハローワークや地域障害者職業センター（以下、職業センターとする）などの支援機関との連携が不可欠で

ある（八重田・柴田・梅永,2000）。学校と職業センターとの連携の一つに職業ガイダンスがある。堀（2003）は、職業センターに対してアンケート調査を行い、学校との連携において生徒の就業意欲の向上につながるガイダンスに取り組むことが望まれていることを明らかにしている。

生徒の実態を見ると、卒業後の働く生活に関心を持ち始めており、事業所での就労を意識している生徒もいる（Table 3）。これらのことから、彼らの持つ就労意識や関心を大切

Table 4 授業案における第1時、第2時の活動の流れ

○月○日 3限目(第1時)	○月○日 5・6限目(第2時)
<p><b>センターについて知る</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・就労するためや定着するために支援してくれる機関があることに気づくようにする。</li> </ul>	<p><b>本時の学習内容について知る</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導者Dは、センターのカウンセラーが指導することを伝える。</li> <li>・ガイダンスは、就労に向けたものであることをおさえる。</li> </ul>
<p><b>センターの場所について知る</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・センターが校外学習などでよく利用してきた駅の近くにあることを理解するためにデジタル画像や動画など視覚的な手がかりを取り入れた教材を用いる。</li> <li>・道程の目印には、生徒が理解できると予想される駅、銀行、コンビニエンスストア、全員が読める文字で書かれた看板、ガソリンスタンド、歯科、交番の画像を用いる。</li> <li>・道程での左折や右折を理解するために動画を用いる。</li> </ul>	<p>卒業後の進路について考える</p> <p>卒業後の就労先について知る</p> <p>基本的な労働習慣について知る</p> <p>職業センターのサービスについて知る</p> <p>企業の求める人材について知る</p> <p>家庭での就労に向けた取り組みの必要性について知る</p> <p>センターの利用方法について知る</p>
<p><b>駅からセンターまでの略地図を作る</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に利用するとき備えて、各自が略地図を作るようにする。</li> <li>・道程を意識するようにする。</li> <li>・略地図には、道順の手がかりとなる画像を使う。</li> <li>・画像は、プレゼンテーション教材と同じものを縮小して使う。</li> </ul>	<p>・プレゼンテーション映像やビデオなど視覚的な手がかりを取り入れた教材を用いる。</p> <p>・指導者Cが中心となって、指導を行う。</p> <p>・指導者Dは机間巡視をし、必要に応じて生徒の発言を促す。</p>
<p><b>次時のガイダンスのための質問を考える</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ガイダンスの指導者は、職業センターから来ることを知らせる。</li> </ul>	
	<p>カウンセラーに質問する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導者Dは卒業後の働く生活、ガイダンスについての質問や感想など、生徒が自分の考えをカウンセラーに伝えるよう促す。</li> </ul>

※  は学習活動を、・印は留意点を示す。

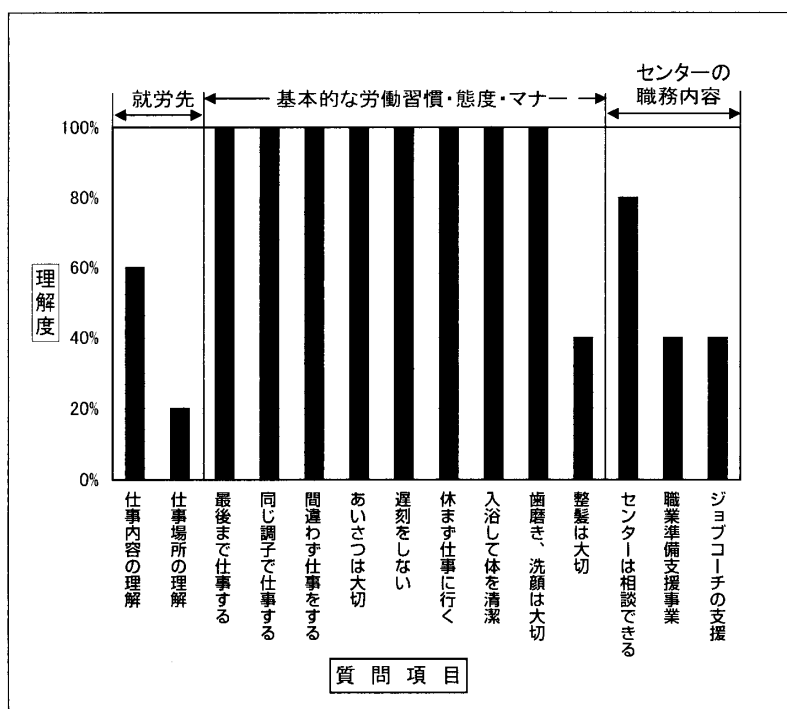


Fig.1 学習活動の理解(第2時)についての評価

Table 5 授業(第2時)についての生徒の評価

	肯定	やや肯定	どちらとも	やや否定	否定
カウンセラーの話を聞いてよかった	3	2	0	0	0
カウンセラーの話をまた聞きたい	1	1	1	0	2
これからも進路の勉強をしたい	4	1	0	0	0

にし、それらを向上させるための職業ガイダンスを進路学習として設けることは、彼らの実態に即していると考えられる。しかし、授業改善のための授業研究で重要なことは、授業で見られる学習者の姿に注目することである(太田,1995a)。このような視点は、教育実践の上では大切にされている。例えば、授業を検討するためには、授業を受けている生徒の様子を直接観察し、生徒の発言に注意深く耳を傾け、授業における実際の生徒の姿を捉えることは欠かせない。また、授業後の生徒の態度、知識や心情などの変容を捉えることも重要である。

本研究の対象である第2時の授業の場合、生徒はカウンセラーの話を聞いたことを肯定的に捉えており(Table 5)、基本的な労働習慣・態度・マナーに対する生徒の理解度は高く(Fig.1)、生徒はビデオやプレゼンテーションソフトで作られた教材の画面も集中して見ている(Table 3)。しかし、職業センターの職務内容に対する生徒の理解度は高いとはいえず(Fig.1)、注意が散漫になる生徒や全く説明が聞けていない生徒もいる(Table 3)。職業準備支援事業やジョブコーチによる支援事業など彼らにとって新規な情報について、彼らが語句を読めないこと、あるいは理解できないことを言葉で表現できず、それらに対応できない場合がある。すなわち、授業者の学習意図や本時の目標に即した生徒の学習活動が見られるか、注意や集中力の低下に対してどのように対応するかを検討することが必

要である。

一方、ハローワークや職業センターなどの支援を受ける場合、サービスの内容や利用方法を知らないためにこれらの機関の支援を受けることに不安を感じる生徒や保護者も少なくない。また、「支援機関の場所を知らない」「支援者がどんな人なのかわからない」ために支援を受けることをためらう場合も見られる。勿田・木村(1999)は、このような本人や保護者の気持ちを軽減させることが必要であり、学校と職業センターとの連携のあり方を伝えることの重要性を指摘している。

第1時の授業で生徒は、「目印になる駅、銀行やコンビニエンスストアなどの名前について積極的に答えて」おり、略地図の作成もスムーズで(Table 3)、「センターが生徒の行動可能な範囲にあることを知り、身近に感じる」という授業意図からすると、この意図に沿った反応であると考えられる。また、第2時の授業では、職業センターのカウンセラー(以下、カウンセラーとする)が指導者となっている。カウンセラーを授業のゲストティーチャーとして迎えることは、授業を通して教師とカウンセラーとの関わりを生徒に示せるだけでなく、生徒とカウンセラーと教師を結びつけることもできる。生徒の実態を見ると、これまでカウンセラーとの関わりはなく、彼らとカウンセラーとが出会う契機としてガイダンスの授業を設定し、カウンセラーを指導者とすることは適当であるといえよう。授業を計画していく過程で授業の展

開と指導の役割分担が検討され (Table 2)、授業の指導者の一人としてカウンセラーが位置づけられており (Table 4)、カウンセラーとの関わりを持ったことがないという生徒の実態が考慮されている。

授業後の生徒の批評を見ると、「生徒はカウンセラーの話聞いてよかった」と思っており、「これからも進路の勉強をしたい」と考えているが、カウンセラーの話をもた聞くことに対しては否定的な生徒もいる (Table 5)。

「主体的な職業センターの利用に向けて抵抗感の低減のためにカウンセラーについて知る」という本授業の意図を考えると、カウンセラーの話をもた聞くことに対して否定的になることは、この意図に沿っていないことになる。これらのことから、授業の展開や指導の役割分担をどのようにするか、あるいは授業意図をどのようなものにするのかを再考する必要性が看取できる。

これらのことから、本研究の対象となった授業の改善の方向として、授業を単元化して学習内容を分けること、より積極的にチームティーチングを取り入れることなどが挙げられよう。

## 謝 辞

本研究におけるデータ使用については、生徒、保護者の方々に了承を得ました。ご理解いただき、ありがとうございます。また、本研究の実施、公表について快く協力、承諾いただきました関係諸機関の方々にも心よりお礼申し上げます。

## 文 献

刎田文記・木村彰孝 (1999) 養護学校生への職業リハビリテーションにおける移行サービスとサポー

トネットワークの機能.障害者職業総合センター研究紀要, No8, 55-67.

広瀬信雄 (1991) 障害児教育における授業研究の動向と課題 - 教育実践への期待とその研究の可能性 - . 特殊教育学研究, 29 (3), 61-66.

堀 宏隆 (2003) 知的障害養護学校高等部と就業支援機関との連携に関する一考察 - 職業への移行支援の現状と課題 - . 東京学芸大学大学院教育学研究科修士論文.

堀 宏隆・松矢勝宏 (2003) 知的障害児・者の「学校」から「職業」への移行支援に関する一考察 - 知的障害児・者が企業就労する際の課題、障害者職業カウンセラーが考える養護学校の教育・今後の連携 - . 日本職業リハビリテーション学会第31回大会抄録集, 49-52.

松矢勝宏 (1997) 進路指導と移行サービス. 発達の違いと教育, 484, 6-9.

松為信雄 (1997) キャリア発達と移行サービス. 発達の違いと教育, 484, 10-13.

文部省 (1999) 盲学校、聾学校及び養護学校指導要領

文部省 (2000) 盲学校、聾学校及び養護学校指導要領解説

太田正己 (1991) 精神遅滞児教育における授業研究 - その1: 授業改善の視点から - . 京都教育大学紀要A, 78, 41-51.

太田正己 (1992) 精神遅滞児教育における授業研究 - その2: 授業批評の方法論的検討 - . 京都教育大学紀要A, 80, 1-12.

太田正己 (1995a) 精神遅滞児教育における授業研究 - その3: 授業目標達成の手だての適切さ - . 京都教育大学紀要A, 87, 29-35.

太田正己 (1995b) 授業の実践段階における授業批評の影響. 特殊教育学研究, 33 (1), 9-16.

大谷博俊 (2002) 知的障害養護学校における授業研究 - 授業批評・生徒の評価・批評者の社会的妥当性の評価を通じたボランティア体験学習の検討、改善の試み - . 特殊教育学研究, 40 (2), 235-242.

清水貞夫 (1989) 対立した意見の中から宝を探そう. 発達の違いと教育, 383 (12), 4-5.

渡部昭男 (1997) 障害を有する青年のトランジション保障と職業教育のあり方. 障害者問題研究, 25 (2), 109-123.

八重田 淳・柴田珠里・梅永雄二 (2000) 学校から職場への移行 - リハビリテーションサービス連携の鍵 - . 職業リハビリテーション, 第13巻, 32-39.